

明治以後の京都市域形成に関する

都市地理学的考察

藤 岡 謙 二 郎

【要約】 都市周辺部の都市化するわちアーバンゼーションは資本主義の發展に併行して必然的におこる地域現象である。ところが近時の日本の都市は都市化せられざる地域を市域に編入せしめる傾向が強い。従つて市域 (City Region) 必ずしも都市域 (Urban District) そのものを意味しない。市域中に閉曲せられた都市圏の地域構造を吟味検討することが都市地理学に与えられた一つの課題となる所以である。筆者はいま歴史的都市京都の明治以後における景観の変貌を地域的に概観し、京都市域における都市圏の成層構造を人口密度、蔬菜栽培地、屎尿汲取配給圏、交通機関、工場の分布等を例にあげて考へてみた。結果京都の場合もまた明治二二年度の市域を核とした成層構造を形成はするが、都市重心が次第に西南に移行したこと、都市圏の範圍は地形や等時線に合致することが多く、それは大正七年度から昭和六年度に到る市域で終り、漸次外周に成層圏をなして、ヒンターランドに終ることを述べた。京都は百万都市であり歴史的都市ではあるが、一部ではより生産的な巨大都市大阪の特殊な衛星都市的性格をも有しており、京都市の理解は旧城下町出身の日本の地方都市理解にも重要な鍵をあたえる。

一 序 言

昭和年代における日本都市の著しい傾向は行政的な新市

の誕生増加と既成市域の擴張であろう。例えば一九五二年すなわち昭和二七年六月現在の二七八の都市についてその市制実施の年代を明治、大正、昭和の三時期に大別してみ

ると、その絶対数は夫々六七、三四、一七七の割合となつて昭和年代に誕生した都市がその過半数を占めている^①。同様に市域拡張についてみても例えばその面積一〇〇方秆以上の都市は昭和一〇年度には僅かに七市で日本全体の都市数に占めるその比率が五・六%であつたものが、昭和二六年度には五九市、二二%に増加しているのをみても明かである。

行政的な新市が誕生増加し、一方既成都市にあつて市域が拡張するといつた右の傾向は、いつたい行政的市域の都市化、すなわち都市周辺農村の質的な都市化作用 (Urbanization) の結果なのだろうか。成程前者についていえば四大工業地帯周辺の衛星都市の或者にみるとく旧来の農村が一躍して都市になり、しかも人口においても一〇万以上をかぞえる関東の川口市 (昭和八年市制実施、一一・四万)、関西の布施市 (昭和一二年、一五万) 等にみる如き工業都市もある。しかし二八〇中、その過半数を占める人口五万以下の都市についてその一々を吟味すると大部分は実はふるい非生産的な地方の町が周辺の広大な面積をもつ村をも人為的

に合併して出来た行政的人為的な都市なのである。後者についていつても同様である。仮りに四〇〇方秆以上の面積をもつ日本の都市といえは東京 (五三八・五方秆)、京都 (五四八・五〇) 横浜 (四〇八・六) 神戸 (四二〇・六) の四市を除けばいづれも夕張、苫小牧、網走、稚内等北海道の諸都市となつて^②市域拡張が決してアーバニゼーションの結果ではないことが明かである。殊に夕張市のごときその面積七六一・七方秆で本州の行政区割からいえば県に相当し、その大部分は林野面積によつて占有せられている。

行政的な市域がいわゆるげんみつな都市域 (Urban District) と必ずしも合致しないことは以上によつてほぼ明かであろう。しかし乍ら大小の質的差違はあれ、この行政的な市域内に都市域を包括することは事実である。しかもこの都市域は中心の Inner City、都心の周辺に都市化せられた農村すなわち近郊村 (Suburbs) や都市周辺地帯 (Urban Fringe) をもち、更にその外周に Hinterland を有するといつたチューネン的な圈構造を形成することも事実である。この場合周辺の都市化が急速に達成される時に

は衛星都市 (Satellite City) が形成される。もとより各都市によつて地形的障害などもあつてこの圈ないし成層構造の内部的構成は同一ではなく、行政的な市域中に、いかなる地域構造を加味した都市圏を設定するかが都市地理学の一課題である。筆者はいま巨大大都市京都の市域内におけるかかる構造を地理学的に分析する目的をもつて、明治以後における京都の都市域形成を地域に關聯づけ乍ら歴史的に考察し、日本における明治以後の市域形成とアーバンゼーションとの關係を考察する資料としたい。

二 明治以後の京都市域の変遷と景観の変貌

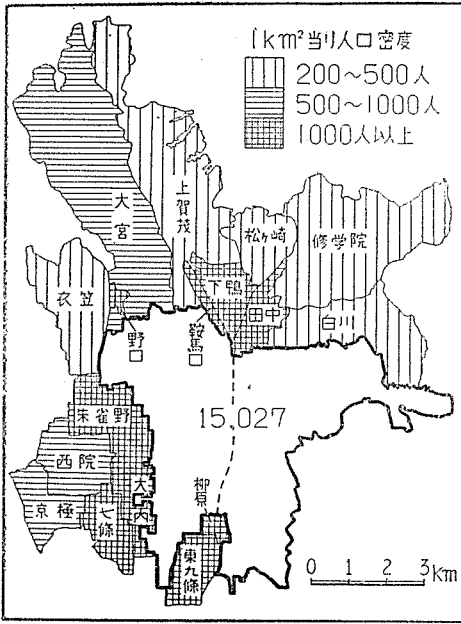
記述の便宜上本項ではまず明治以後における京都市域変遷の具体的事實、換言すれば行政的な市域編入とそれに伴う各種人文景観の變貌を概観し、次項において改めて人口密度その他を基準として京都市域の明治以後における都市化の進行状態や都市圏の構造を吟味することにする。

都市周辺の都市化を促進する源泉はいうまでもなく産業革命に伴う資本主義機構の發展であり、アーバンゼーション

の純粹な型は通常工業化の進行した大都市とその周辺地域にみられる。すなわち都市の工業化は市部人口や工業の都市集中を分散せしめ、周辺の農村をして都市通勤者の住宅地や、都市向けの蔬菜等換金作物の栽培を容易ならしめ、両者を結ぶ交通機關の發達によつて都市との交通距離を漸次短縮せしめて行く傾向をとる。①工業化の進んだ大阪及びその周辺地域はかかるアーバンゼーション進行の純粹型を形成することは改めて別の機会に論じることにするが、(第五圖C参照)、しかし元來都市であることは必ずしも生産的な工業都市であることのみを意味せず、ひろくあらゆる文明的機關を備えた人口の稠密な消費都市や商業都市をも含むものと広義に解するならば、京都の場合も亦あらゆる点で都市たる資格を有している。殊に明治後半にあつて全国でも第二位を占める工場の設立をみたことや、②最高学府の設立、郊外電車の敷設等が都市周辺の都市化や景観の變貌を促進せしめるに役立ったことが注意されねばならない。

既述の如く京都の現在市域五四八・五〇方軒、これを市制実施の明治二二年度の二九・七方軒に較べると正に一八

倍強、人口また二三年当時は二七、九万人であつたのが一〇・五万人となつてゐる。明治二年（一八六九）東京遷都後京都に課せられた課題は千年の古都をいかにして維持して行くかといふことであり、古い京都は新しい日本の京都として再出発すべく運命づけられたのである。しからはそれ以後百年たらずの間にみられたその市域や景観の姿貌は如何。



第1図 明治42年（1909）当時の京都市域並びにその周辺の近郊村

明治以後の京都市域形成に関する都市地理学的考察（藤岡）

明治以後現在までにいたる市域の編入回数前後七回に及ぶがこれを大別するとほぼ四期に分けることが出来る。第一期は市制実施前の明治二年（一八八八）六月に行れた鴨河以東地域の市域編入、具体的には当時の愛宕郡の粟田口、南禅寺、吉田、岡崎、浄土寺、鹿ヶ谷の六ヶ村並び東山丘陵を包括する紀伊郡今熊野、清閑寺の二村が夫々上京区及び下京区に合併されて新京都が出現したことであり、やや遅れて同三五年（一九〇二）二月には市域の西南隅すなわち葛野郡大内村のうち大字東塩小路並びに西九条地域が市域編入をみた時期を包括する。つぎに第二期は大正七年（一九一八）四月の市域編入であり、この場合も亦市域に接した周辺農村の都市編入となつてゐる。具体的には盆地東北隅においては愛宕郡白川、田中、下鴨、鞍馬口、野口の全村、上賀茂、大宮兩村の一部、西方では葛野郡衣笠村が上京区に編入をみた他、上京区には葛野郡朱雀野、大内、七条、西院村の一部、さらに紀伊郡柳原町、東九条、上鳥羽並びに深草各村の一部である。（第一図参照）第三期は昭和六年（一九三一）四月の編入であり、面積的には最

も大きく、いわゆる大京都の出現期である。区域も亦從來の上京、下京の他に、左京、右京、東山、伏見といった現在の六区が形成せられていた。いまその名称を列記すると次の如くなる。（かつこ内は編入区域）、愛宕郡上賀茂、大宮、鷹ヶ峰の各村、（上京区）、同修学院、松ヶ崎兩村（左京区）、宇治郡山科町（東山区）、紀伊郡吉祥院、上鳥羽兩村（下京区）、葛野郡花園、西院、太秦、梅ヶ畑、梅津、京極、松尾、桂、川岡の各村及び嵯峨町（以上右京区）伏見市、深草町、紀伊郡竹田、深草、堀内、下鳥羽、横大路、納所、向島及び宇治郡醍醐村の各村（以上伏見区）である。第四期は主として終戦後市域編入が行れたのであり、詳しくは昭和二三年（一九四八）四月の葛野郡中川、小野郷兩村（上京区）、昭和二四年（一九四九）四月の愛宕郡雲ヶ畑村の上京区編入、愛宕郡、岩倉、八瀬、大原、静市野、鞍馬、花脊、久多七村の左京区編入、さらに翌二五年（一九五〇）十二月に実施せられた乙訓郡大枝村（右京区）、同久我、羽東師兩村の伏見区編入を意味する。

以上の四期の編入面積を表示すると次のごとくなる。

時期	細期	理想的都市 圏の半径	中心から の最大 半径	面積
第1期	明治 21	3.08km	約6.0km	29.77km ²
	35	3.18		31.28
第2期	大正 7	4.39	7.5	60.43
第3期	昭和 6	9.59	約16.5	288.65
第4期	昭和 23	10.18	約35.0	325.31
	24	13.07		535.16
	25	13.22		548.50

料にのびている。しからばこれら各時期の市域編入と前後して以前の景観はいかに変貌していつたであろうか。またそれはどの程度の農村側のアーバンゼーションの結果市域変入をみたものなのだろうか。この場合景観の変貌を促したものは何であつたらうかを考えてみよう。全四期を通じて景観の最も著しい変化はいうまでもなく第一、第二兩期であり、他の都市の場合と同様日本における産業革命が除

第三、第四兩期の編入面積の総計四八九・四八方料、すなわち全市域の九〇％近くを占めることになる。面積を円に仮想した場合の半径は最初の三、〇八料から二・三、二二

々に進展せんとする時期であり、京都の場合当時全国でも工場数は第二位を占め工業の發達が顯著であつた時期である。以下これらの前提を加味し乍ら都市周辺の姿貌を地域別に概観しよう。

まず盆地の東北隅からみよう。何故かならばこの地域は明治後の京都復興にもつとも関心が払れた地域であるからである。ここにおける都市化を促した直接の原因はいうまでもなく疏水工事の完成（明治一八年に起工着手、二三年に竣工）^⑥鐘ヶ淵紡績京都工場（三九年設立、四三年当時の従業員一四三三人）、京都織物株式会社（明治二五年設立、四三年当時の従業員七七八人）その他各種紡織友仙工場の設立、^⑦最高学府の設立（二七年に第三高等學校、三〇年六月に帝國大學）内國觀業博覧会の開設（二八年）に伴う市電の開通等であり、ことに岡崎、吉田、淨土寺等の各村は二二年に市制実施をみる直前に市域編入をみたのである。附近の竹籜や荒撫地は転じて大規模の蔬菜の栽培地となり、また疏水の分流は水田面積を拡大せしめた他、吉田、岡崎を中心としては各種紡織、染色工場が多数設立されて附近の景観が俄かに一

変した。聖護院の大根、蕪青、胡瓜、鹿ヶ谷の南瓜等て代表される蔬菜類の栽培は既に徳川時代の終り頃からもみられたのであるが作付率の最大であつた時期はこの明治の末葉であつた。^⑧白砂で標識される北白川扇状地の周辺部がその栽培地として選ばれたのであるが、ここから鴨河の河原にかけては茄子、胡瓜の促成栽培も盛んであつた。しかし立ち列ぶ都市的建物の増加はやがてこれらの耕地面積をもせばめ、早くも大正七年にはこの地区を市域に編入せしめるまでになつたのであつて、これら市街地の形成については明治末の地形図を現在のそれと対比すれば明瞭となる。また当時の市域周辺部の様子については明治四三年發行の『愛宕郡志』に詳しい。例えば白川村の特産物としては白川石、^(A)白砂、花等の名があらわれ、後者については「右京都市に販売す」とかかれてある。他に白川の谷口には水車集落があり、製米麦の他、伸銅、金粉製造工場等もあり、また田中村には搾乳場が一五、乳用牛三一〇頭^⑨とあり、近郊村的な性格がより顯著である。北の下鴨村についていつても「農業の他雑業を営む者多し」とあり、註^(B)にみるこ

とく公務及び自由業者の占める人口比率が他の部落に較べて極めて多いことが注目されるのである。昭和六年になつて、この地域は第三次の市域編入をみたわけであるが、その後今日に到るもなおかかる郊村的な性格は失はれず、兼業農家に加えるに、職業別人口からは公務自由業者が多く、今日ではそれが市営バスによつて京都駅をいしは西院と結ばれることによつて大阪の郊村的な性格をも有していることは後述の如くであり、花卉類の栽培また今なお住宅地のところどころを利用してみられる他、近年は和花に加えるに洋花を他から持参して、販売している。^(A)一方昭和のはじめ後出町から叡山電車が八瀬及び鞍馬に通じることによつて、沿線の郊村化が進行して行き、昭和九年には私営の京都バスの花背線及び途中線の完成をみるに到つたのである。つぎに北部にあつても西陣織の近代化が注目さるべく明治六年に紋織機たるジャカードその他の洋式機械が用いられてからその近代化が促進せられ、西陣を中心とする上京区域は紡織工業の中心地を形成し、次第にその周辺にも波及することになつた。註⑩に見る如く殊に大宮村の職業別

人口中工業人口の占める比率が多いのはこれが為である。かくてこの附近は京都織物紫野工場（三〇年設立、四四年当時従業員三二二人）、雲林撚糸合資会社（二九年）その他西陣系織物会社等の設立によつて、これ以前は大徳寺の門前町として僅かに街村の発達をみ、それ以外附近一帯に竹鉾地帯を形成していたこの紫野の台地地帯また、急激なる景観の変貌を呈すことになつたのである。一方東北部にあつては下鴨地域の都市域編入と共に従来のヒンターランドが都市周辺地帯に入り、これまで聖護院や鞍馬口を主とした蔬菜栽培の中心地が上賀茂^⑭や松ヶ崎村へと北進、ここでも亦昭和六年度の市域編入をみたわけである。西北部にあつても谷口の鷹ヶ峰が商業集落としての機能を次第になくするに到る一方、市バスが通じ、これより後昭和一二年度には周山街道經由北桑田郡鶴岡行の国営バスが北桑田の山地を結び今迄の馬背運搬による京都北郊部落との交通距離がより短縮されることになつた。中川村の杉材また床柱として京都大阪へ運搬されることになる等耕地僅小な山村地域の都市化は全くこれら交通機関の発達に負うている。^⑮

いま明治四二年当時の愛宕郡所屬の村々の田畑の反別を約五〇年後の昭和二七年度現在のそれと比較してみると註⑩のごとくなり、都市域から離れるに従つて、兩者間の數値の差の少くなりゆく様子が知られるであらう。かつての白川越や北方丹波越の谷口集落として古い地形図上に街村を形成したこれら郊外の集落も今は市街地の中に入れられて往年の面影をとどめない現状であり、近年岩倉には市の競輪場が設置、市電またここに延びんとしており、一方宝池は市の遊園地となり、同様に鞍馬街道に沿つた深泥ヶ池また市バスの終点地域となつてこの両点を結ぶ以南が市域たる感が強いことは周知のごとくである。

同様な景観の姿貌は右京地域にも亦南部地域にもみられる。右京はいうまでもなく平安京において最も早く衰頽したところであり、殊に千本通以西は低湿地を以て著名であるが早くから壬生菜、せり等の栽培地となつており、朱雀野、七条、吉祥院^⑪あたりの農家また早くから都市化せられ明治三一年には朱雀野村に綿糸を主とする「日本製布株式會社」(四四年当時の従業員一八六、六人)の設立をみる等工

明治以後の京都市域形成に関する都市地理学的考察(藤岡)

場地帯ともなつていつた。^⑫一方北方の鷹ヶ峰扇状地から西南につづく衣笠丘陵やさらに嵯峨野の新时期積丘陵には畑作が卓越し、北野から鳴滝あたり迄は植木を主とした花卉類の栽培地、衣笠また大正から昭和にかけて菜豆の栽培地として著名である。^⑬ところがここでも亦明治四三年には早くも嵐山電車^⑭の四条線が開通(北野線は大正一五年)されることによつて近代化が促進せられた。このコースはかつての徳川時代の西高瀬川による材木運搬のコースでもあり、右京地域の都市化がまたこれら材木の運搬や嵯峨野における製材業の發達とも關聯を有している。大堰川で筏運送せられた材木を荷揚する谷口集落として發達した嵯峨の歴史は古い^⑮が明治三七年には早くも嵯峨材木會社が設立明治四三年頃から製材に電力が使用される運びとなり、原木は北山からトラックで運搬され西高瀬川がその機能を失つた今日でもなお嵯峨や千本通、壬生地域はこれら製材工場の中心を形成している。^⑯この他嵯峨に近い梅津村には明治三九年に当時京都唯一の洋紙を主とする梅津製紙會社が設立、また右京地域といえば一般に低湿地で洪水毎に被害を蒙つた

が天神川流路を桂川に注入せしめる工事が昭和一二年以後に成り、西院、山内附近は早くも京都の西の京に近接した工場地帯を形成し、現在島津製作所の工場が列ぶ、附近に旧新京阪（昭和三年開通）の西院があつて、將來の京の西の玄関口を約策している。又西方の太秦から帷子辻附近の低地一帯にかけてはすみきつた空氣と静かな環境を利用して早くから映画会社の撮影所となり、一方嵯峨野の丘陵周辺地帯は現在多毛作をもつて著名な畑作地域、蔬菜の栽培地域となり、さらに都心居住者のための住宅地域をも構成するに到つてゐる。^⑩この他右京の工場地帯は西南の方向にのび桂から乙訓郡の向日町、長岡町に及び近時市域編入如何が双方間の政治的問題とも関連して話題を將來に残している。

つぎに南部地域の發展をみるにここにおいては文祿三年秀吉が伏見桃山に伏見城を築き、一時城下町が形成され、以後徳川の伏見奉行に継承されてからも京都に対する外港として榮えた事、つまり京都市域の南部への發展のためにはどうしても、古いこの歴史的な二つの核が結合さるべき運命にあつたことはいうまでもない。伏見は昭和四年市制

実施後間もなくそのまま伏見区を形成、京都市域に編入されることになつた。この二つの核を結ぶものは慶長一六年角倉了以によつて計画実施せられた東高瀬川の開さくであり、さらに市電伏見線の開通（明治二九年）、京阪電車の五条への開通（明治四三年）にあつたことはいう迄もない。かくて伏見と京都の間に挟まれた深草附近の都市化はまぬがれぬものとなつた。これらと併行して明治四一年には第十六師団を始めとする衛戍地域となり、且つ伏見城につらなる洪積丘陵は早くも桃山大根の名で著名な蔬菜の栽培地ともなり、人口また例えば大正九年度の深草村に例をとれば、一四、一一〇人となり、山科村の一〇、〇九五人と共に都市型を示すに到つた。いま大正一四年度における人口一万人以上の京都府下の市町村を順次あげてみると六七・九万人の京都市を別とすれば、伏見町の三〇、五四四人、深草町二一、二〇五人、福知山町二〇、一九一人、山科村一四、九六四人、綾部町一一、八二九人の五つがあげられるが、準城下町出身の歴史的都市ともいふべき綾部町が早くも下位となり、この深草町がやはり城下町出身の福知山

の上位に位しているのが注目されるのである。これより以後昭和三年には奈良電車が開通、同七年以後永い間封建都市京都をまもる自然的障壁として横つていた旧巨椋池を主とする七百町歩の干拓成り^⑨京都市域は山城盆地の南の出口にまで迫るに到つたのである。右の伏見と旧京都市域の間に挟まれた都市化の進行はとみに進んだが、うちまず東寺以南の低湿地はこれまた早く九条ねぎ、壬生菜等の栽培地として名をあげ、吉祥院附近の農家は今もお根菜葉菜両用の蔬菜專業農家が大部分を占めるといつた現状である^⑩。

この低湿地は亦一方に工場地域としても發展した。すなわち早く明治三九年に松風陶器会社の設立をみた他、下京区域の現在の主要な工場（例えば日本電池、松下電気、大同染工、三谷伸銅その他）はいずれも上鳥羽、西九条、吉祥院等旧京都南辺の低地に集中している有様である。これより先き市電の東福寺線が昭和三年に開通し（但し東福寺・大石橋間は昭和二年）まもなく今熊野附近の景観もまた都市的なものに変じて行つた。山科盆地についてはふれなかつたが東山丘陵によつてへだてられたこの地域また、昭和六年度の市

域編入によつて東山区となつたわけであるが、この地がまたふるく琵琶湖・淀川水運の陸上交通の要衝として、且つは蓮如上人の山科本願寺の寺内町として發達した歴史をもつている。これより先き京津電車は大正元年に大津と京都の三条間を結び、山科またその中間駅となつた他、刑務所や鐘紡山科工場の設置地域となつたこと等は京都との結合をより密接ならしめたものである。

三 明治以後の京都の都市圏の構造とその変遷

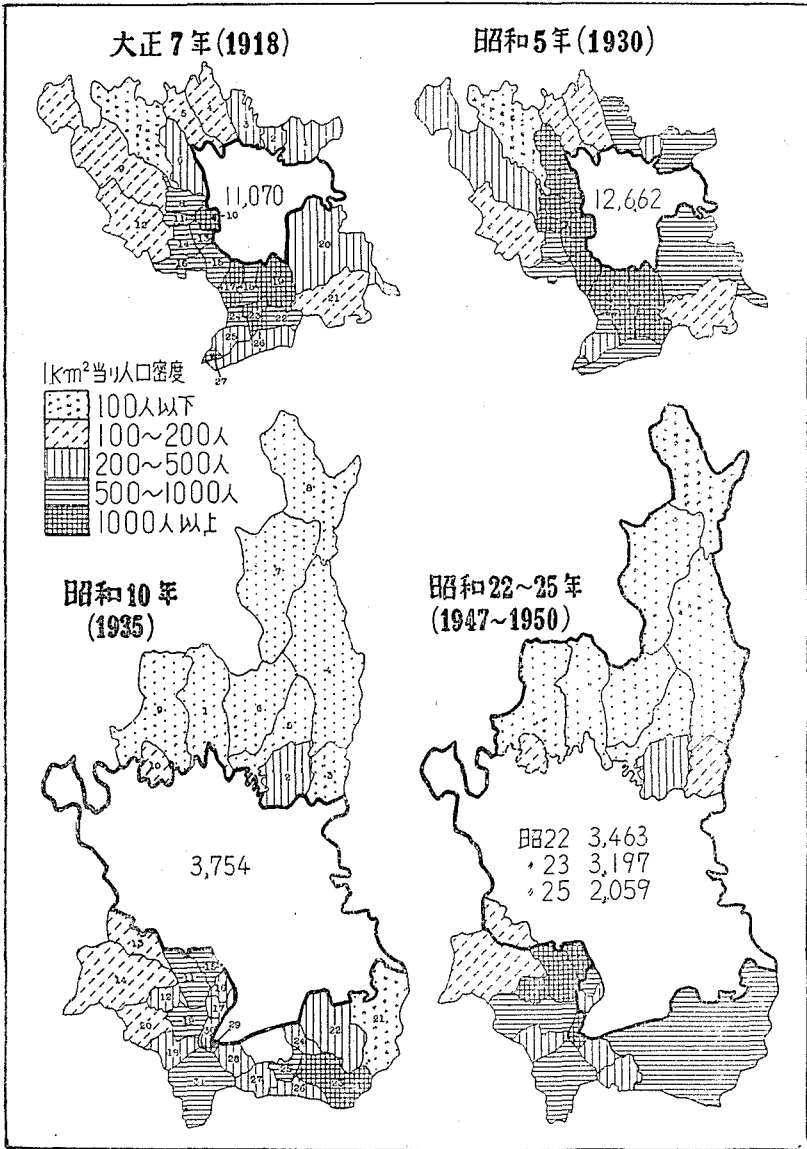
以上によつて明治以後における市域の変遷と景観変貌の地域的概略が明かになつたことと思う。しからば本項では之等を基礎として、明治後の京都市域の拡大と都市圏の構造的吟味を考察してみよう。都市圏の設定には種々なる基準が用いられる。アメリカの都市社会学者たるクイーン及び同地理学者トーマスは都市であることの基準として大きな公共建築物の集会所であること、大都市はしばしば人口のさらに密集した“metropolitan district”を有すること、人口密度が大であること、工業化が進み農業人口の少いこ

と、各種の団体組織を有すること、住宅様式が異なること、労働分化の微細化、社会的接触の場所、異質性の集合体、これらを結合した complexity & mobility が都市には流れていることを指適しており、日本でもまた同じ様なクリテリアがとられている。他にドイツキンソンまたひとりアメリカのみでなく、歴史の古ヨーロッパの市域(City-Region)に例をあげて Urban Complex の各種の社会経済的構造を分析している。^④一般に大都市圏中にはかる複合性のすべてを持ち合さなくてもその一部を有し、しかも都市に結ばれている農村——通常近郊村と呼ぶ——をもこの中に包括せしめている。この近郊村を取巻いてさらに外周にはヒンターランドが形成されている。郊村やヒンターランドはもとより都市域のものではないが大都市圏形成の重要な因子ではある。京都の場合しからばかかる大都市圏の形成はいかにして成立して行つたであらうか、ことに行政的な京都市域内における各時期毎の都市圏の構造如何を市域編入と関聯づけて改めて考えてみたいと思う。最初主として人口密度をクリテリアにおいて考えてみる。何故なら

ば人口密度は土地における人間活動の姿をたんに示す具体的なアーバニゼーションの一指標たりうるからである。

いま市域形成における第一期を代表するものとして明治四二年度を取り上げ、第二期としては大正七年及び昭和五年度を、さらに昭和一〇年度をもつて第三期を代表するもの、最後に第四期を示すものとして昭和二二―二五年度の市域並びにその周辺の人口密度を取りあげた。これらの具体的な様子は既掲の第一図及び第二図によつて明らかである。いずれの場合でも人口密度一〇〇〇人以上、九九九人—一五〇〇人、四九九人—三〇〇人、二九九人—一〇〇人、一〇〇以下の五階級に区分した。まず当時の市域周辺から考察するに第一期にあつては人口密度の極めて高値なることが注目せられる。すなわち面積僅小な野口、柳原両町の五千人以上を例外としてもなおいずれも千人以上の数値を示し、就中葛野郡の朱雀野、大内両村、愛宕郡の鞍馬口、田中両村は二千人以上となる。^⑤反対に一〇〇人以下はもとより、三〇〇人以下もない。つぎに大正七年度の市域拡大時直後についてみる。個々の数値は註⑤に示すが如くであ

明治以後の京都市域形成に関する都市地理学的考察(藤岡)



第2図 各期における市域並びに周辺の人口密度

の地帯は ○人以上 じて五〇 ない。通 るにすぎ 草町があ 田村、深 伊郡の竹 院村と紀 野郡の西 すれば葛 を例外と の伏見町 ば紀伊郡 のといえ 以上のも 時一千人 るが、当

市域の西南隅に集り、第一期の人口密度の重心が盆地の東北隅にあつたのと対照を示している。ところが同じ第二期でも昭和六年度の市制実施の前年たる昭和五年度には千人以上の区域が可成り増加している。西院の四、六七五人を最高とし、北から花園、太秦、京極、吉祥院、上鳥羽、竹田、深草、堀内の諸村があげられる。また増加の比率も通じて西南地域に著しく、一方この僅か一・二年の間に密度値の二倍以上に増加したものとしては、修学院、花園、太秦、西院、吉祥院、竹田、堀内、醍醐の諸村があげられる。しかし一方昭和五年当時にもなお二〇〇人に充たない村があり、上賀茂、大宮両村が、明治後に較べてむしろ人口が減少しているのを始め、松尾村は一七六人、嵯峨町またその面積の広大なために大正七年度には一七五人、昭和五年度でも二七四人となつている。つぎに第三期の昭和十年度についてみる。この年には既に市域が拡大しているために、市域に接した町村中人口密度において一千人以上を越えるものは皆無であり、漸く西南隅地域で五〇〇人以上の地帯がみられるにすぎない。すなわち乙訓郡の久世、向

日町、新神足等であり、昭和二二年度はこれらの地域は既に一〇〇〇人以上となり他に新設の長岡町が五五五人、宇治市また五六四人となつて大京都の南辺に接している。しかるに一方北辺地域にあつて昭和一〇年度にてもなお例えば雲ヶ畑、静市野、鞍馬、小野郷の諸村等一〇〇人以下の地域が市域に接し、これらの諸村は昭和二三年以後の市域編入直前までもなおこれに近い数値を示している。

以上によつて各時期毎の京都市域拡大前後における市域周辺部の人口密度の変化がほぼ明かにせられたことと思う。之を要約するならば人口密度に関する限り、その重心が最初は市域の東北部にみられたのが次第に西南部に移行しつつある現状が知られるであろう。このことは前節にみた景観変貌の進行状態や後述する工場の分布とも一致するものであることは注意されねばならない。事実人口が集中し密度が大となることは都市化のいちぢるしい証拠であり、具体的には工場や住宅地その他いわゆる都市的建物の増加を意味しているのである。このような地域が市域に編入され、都市域の自然的拡大をみるのは当然であるが、一方昭和六

年頃以後すなわち第三期以後の傾向としては、人口密度が示すが如く、都市的ならざる地域の市域編入が注目せられることである。一方市域自身についていえば行政的な市域の拡張に伴つて人口密度の數値が次第に減少する傾向をとることは当然である。具体的にいえば京都市域の人口密度は大正七年の市域拡張直前たる大正六年の一七、九九四人の最高値を最後として第二圖にも示した如く、次第に減じ、ことに乙訓郡の人口稠密な久我、羽東師岡村合併の昭和二五年直前の京都市は僅かに一、九六七人という數値を示すことである。而してこれらが昨今の日本都市の著るしい傾向であることは最初にも述べたところである。

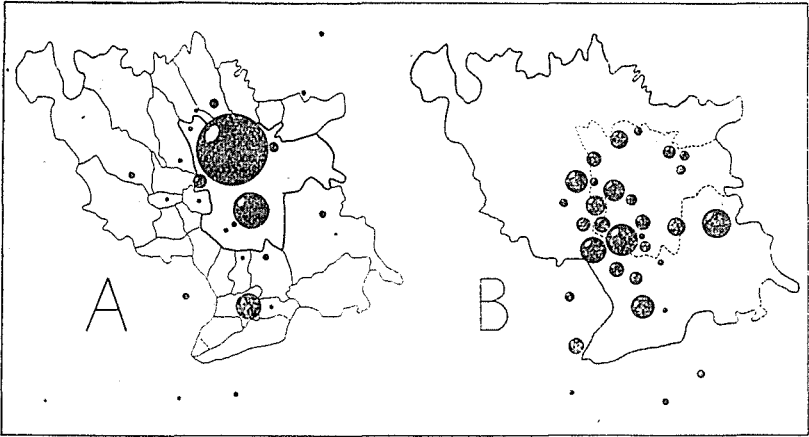
しからばいま右の人口密度の五階級について仮りに一千人以上を都市化せられた周辺地域 (Urban Fringe) 五〇〇人以上を準周辺地域 (Suburban Fringe) 一〇〇人以上を下を自然地域ないし後背地 (Natural Area or Hinterland) の指標とするならば、人口密度についていえば京都市域形成時における第一期には行政的新市域形成前後にあつてもほぼ都市を中心とした同心円的な正規な圈構造が成立して

いたのに対し、第二期すなわち大正七年度の場合市域形成直前はなお都市域を中心として、ほぼ同心円状に周辺地域や準周辺地域即ち郊村をふくみ、さらに自然地域が外周を取り囲んでいたのに対し、市域形成と同時に盆地の北方部は直ちに市域が自然地域に接するという修正された形をとり、これは昭和六年度の第三期の市域形成直前において漸く回復せられたが、それでもなお盆地の北隅及び東方は北山及び東山山塊といった自然的障害もあつて圈構造に異変をあたえた。以後第三、第四期を通じてはかかる閉曲せられた圈構造が人為的合併による結果市域自身の中にもちこもれ、共に直接には準周辺及び自然地域でとりかまされることになつたのである。ただ乙訓郡の向日町のみは種々の事情で京都市域に編入されずアーバンフリンジの型を示しているにすぎない。

右は人口密度のみにつき、しかも市域の周辺のみを問題にして取上げたのであるが、既述の如く都市圈設定の指標にはもとよりかかる間接的なもののみで不十分であることはいうまでもない。何故かならば人口密度の増加は、工業

化の結果おこる人口の移動的增加を示す場合が多いからであり、そのためには工場その他いわゆる都市施設の分布増加の様子をみなければならぬ。またそれと共に一方都市化は既存の農村における非都市的状态をして、都市的状态に変化せしめることである。この場合例い人口の増加をみなくても既設の農村的施設や農村の社会的構造に変化が加えられればよいことになる。事実京都市は農業人口中、蔬菜專業農家数が多く、水田面積においても二毛作以上の田が多く、畑地面積が耕地の減少化にも不拘あまり変化を示さないこと、その他自由公務業者の比率が多いことも特殊都市としての性格を示すようである。この場合の都市圏の決定にはまた具体的には集約的な蔬菜栽培の範囲、各種工業以外の都市施設、交通機関の利用頻度、即ち通勤範囲、その他尿尿汲取配給圏等が問題にされねばならない。これらの或者については既に前項の景観の姿貌においてもふれたが、他に蔬菜生産地や尿尿汲取配給圏については、既に宮出秀雄、橋本元等^⑤の研究がある。殊に後者の研究を通じて知られる京都市の尿尿使用範囲及び蔬菜の栽培は大正昭和六年

の市域合併地域をそのヒンターランドとの境とする様である。即ち四里以内の地域では尿尿使用量の六七%以上を占めまた蔬菜作付反別の耕地面積に対する割合は市内の農業地においては八二、三%、一里以上二里以内では四五%を占めることが報告されている。他に尿尿汲取圏のみについていえば昭和二三年以後の市域編入の左京地域、さらに東方では大津市周辺地域、西方では亀岡地域迄がサブ・アーバンフリンジに入れられるようである。一方林業においても中川村が北山丸太の製材供給地、即ち都市化の早い山村として指適され、結局これら右にみた人口型からのアーバンフリンジが他の方面からはサブ・アーブスを形成していることが知られる。つぎに交通機関としての市営バスの営業路線の延長についてみるに昭和四年には四三・九二軒であつたものが一〇年後には六七・五二軒、二三年度には七七・四六軒、現在では一一一・一軒となり、^⑥これのみをあげると市域拡張と比例してその数値が増大され都市化が順調に進行して遂に市域全体に達した如く考えられる。けだし市バスの敷設はアーバン・ゼーションの先駆をなすからで



第3圖 京都における工場の分布地域

{A. 明治44年当時の工場の分布 (従業員10人以上)
 {B. 昭和27年" (" 50人以上)

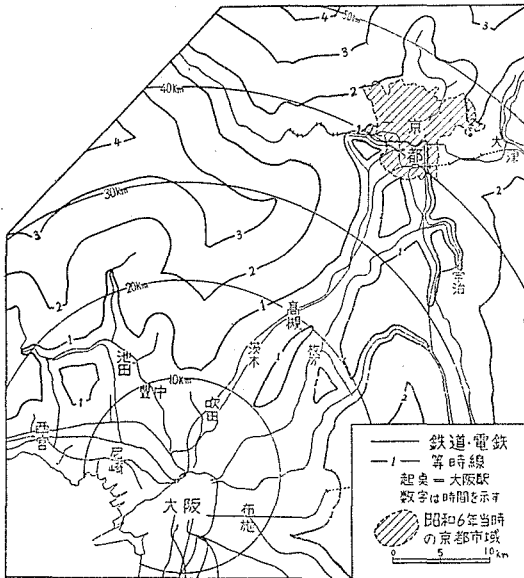
もあるが、もとより後述する等時線が示す如くバスや郊外電車の沿線以外は必ずしも都市化されていないことはいうまでもない

もないのである。これに対して市電の軌道延長はそれが都市的建物の立ち列ぶ市街地を通過するだけに、都市域拡張の實質を示すが如くである。即ちその増加数は次表のごとくなり、二二年度を最後として市域の拡張にも不拘、殆んど増加していかないのである。^{⑤⑥}このことは工場の設置についていつても同様で、工場数の増加は著しく、明治三二年当時二〇三であつたものが二四年度には九、三二八

明治32	9.2km
" 42	40.2
大正 8	47.2
昭和 4	110.0
" 14	140.1
" 22	149.7
" 25	"

二五年度には一万以上となつてゐる。従業員五〇人以下の小規模工場がその大部分を占めるのであり、その性質上伝統的な紡織工業が卓越するのであるが、いま仮りに明治四四年については従業員一〇人以上、昭和二七年度現在については同じく五〇人以上の工場の区域別一覧を示せば夫々註④及び、⑤の如くなり、之を分布図に示すと第三図A及びBの如くなる。前者についてはその過半数を紡織が占め、しかも旧上京区域に集中する有様が知られよう。之に対して後者にあつては紡織工

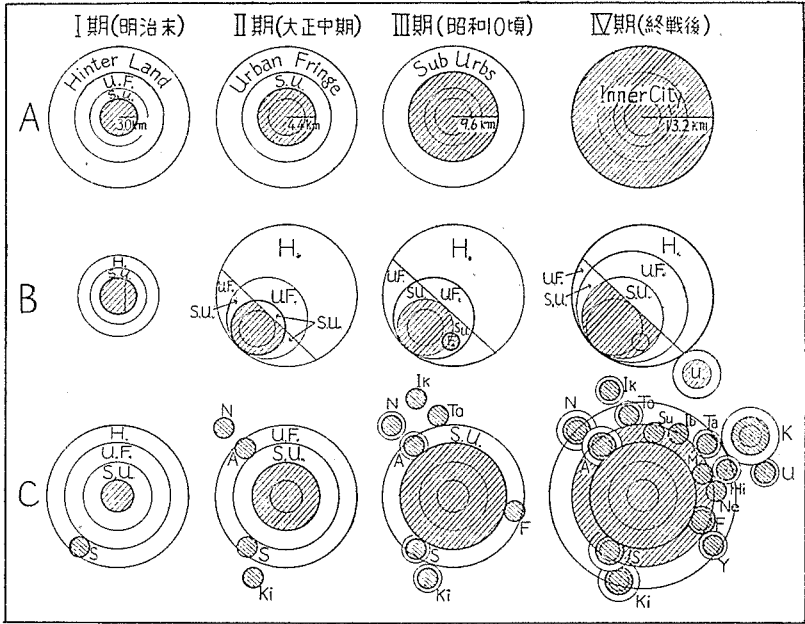
業の占める比率は約三分の一となり、金属、機械、化学等近代工業が増加し、しかもそれが前項でも述べたように下京区の上鳥羽や吉祥院、東西両九条を中心とした地域さらに右京区南部に集中し、一部は乙訓郡の向日町や長岡町に



第4図 大阪駅を中心とする等時線

及ぶことが知られるであろう。工場分布を指標とした場合の京都の都市圏の拡大は、かくて既述の人口密度のそれと

軌を一にしていることが知られる。これを等時線についても同様で京都駅から京都府東北端までは四時間以上を要し、二時間以上の等時線がバス道路に沿って北方や東北方へ、さらに汽車の山陰線に沿っては西方へと突出を示す以外には市街地に近く走り一時間以内の地域がほぼ大正七年度の市域に、さらに昭和六年度の市域にあつては大体一時間ないし一時間半線が西北の山地部に突出することが知られる。一方第四図に示すごとく大阪駅を中心とした等時線を描いてみても一時間線が旧市域の西南一帯を包括することとなり、昭和六年度の市域の一部は結局京都のサブアーブスやアーバンフリンジであり乍ら、大阪のサブアーブスやアーバンフリンジをも形成することが知られるのである。京都の場合市域拡張にも不拘、完全な都市域は大正七年度から昭和六年度に到る市域であり、これを中心として等時線で示されるが如き閉曲した西南に中心をもつ同心円的成層構造をなすことが知られるであろう。しかもこの都市域は一方山城盆地における沖積平野や、それを取り囲む洪積丘陵、具体的に標高で示せば盆地床との比高百数拾



第5圖 京都及び大阪の市域並びに都市構造の変遷

記号説明 { Bの項目中 F (伏見), U (宇治)
 CのS (堺) A (尼崎) K_i (岸和田) N (西宮) I_k (池田) I_b (茨木)
 F (布施) T_o (豊中) S_u (吹田) T_n (高槻) M (守口) H (枚方)
 N_e (寝屋川) K (京都) U (宇治)

米でかこまれた地帯とも一致することになるのである。いま以上に論述した大都市圏形成の様子並びに現状を綜合して理論的に示すと第五圖の如くなる。Aは市域の拡大がそのまま質的な都市化の結果だと考えた場合であり、Bは以上の結果を参照して之に幾分修正を加えたものである。(但し斜線は都市化せられた部分、太くえがいた円は市域を示す。Bの場合もとより成層とはいへ乍らげんみつな円をなさず地形的障壁や交通網の具合によつて閉曲されることはいうまでもない) これによれば市域の拡大をみればみるほど、又成層圏の外周に到るほど質的变化がなく、京都の場合昭和六年以後には既にアーバン、フリンジが市域に入り二三年以後には既にアヒンターランドが市域にふくまれる様子が明らかとなる。さらに同図Cは大阪を中心とした圏構造の想定図である。この場合は既に第二期にあつて、尼崎や堺のごときが郊村中の衛星都市として巨大都市に吸引され、更に第三期以後は、もとの

アーバンフリンジに多くの機能を有した都市が中心都市の衛星都市となつて吸引されている様子が明かである。京都における都市重心の西南への移動は、京都がまた他の衛星都市と同様な性格をあらわし始めたことを示している。各衛星都市が周辺にまた自己の成層圏を形成して成長して行くことは既に述べた京都の場合と同様であり、やがて各都市のアーバンフリンジは巨大都市の最外側の共通した周辺部を構成することを暗示せしめる様である。その場合の宇治市が占める位置は極めて興味あるものになるだろう。

四 む す び

以上によつて明治以後の京都の都市圏の構造がほゞ明かになつたが、この最後の大阪の場合との構造上の比較に關しては稿を改めて論じるつもりである。ひとり大阪といわず日本の四大工業地帯における都市の形成は市域拡張と併行してその周辺に衛星都市を形成することをもつて特徴とする。しかも既述のごとくこの衛星都市自身が右の京都でみた場合のような進化をづつづけているのである。つまり巨

大都市は衛星都市をその大都市圏の一環として包括することによつてさらに大きな複合成層圏を形成するのである。具体的にいへば、衛星都市の周辺地帯は自己の都市に養われて拡大し乍ら、一方巨大都市に結びつく傾向をとつていゝ。かかる意味での現在京都のもつ大阪の衛星都市的性格については、なお多くの論すべきものをもつていゝが、今はただ例えば昭和二二年度即ち第三期における京都の各区別職業別人口を註例に示して筆者の企図する目的の一端を暗示するにとどめておく。これによれば自由業が左京及び上京区に最も多く、しかも左京区のみについていへば自由業が職業順位からは第三位を占めていることが知られる。しかもこれらの一々について吟味すると、そのいずれもが勤先を京都にもつもののみではなくて大阪にもつ者も少くないのである。朝夕における北白川や野々神町行等バスのラッシュアワーが之を具体的に示している。之を要するに明治後の西陣織の歴史を実は千年の古都京都自身が示しており、その姿を次第に近代なものに變貌せしめんとしているのが現状であらう。ひとり京都といは

ず小規模ながら日本のゆわいる歴史的都市はいずれも都市形成上京都に類似した性格をもつてはなからうか。

- ① 日本都市連盟「日本都市年鑑」(昭和二八年)
- ② 同 右
- ③ 森須美術、北海道市町村の地域性〔地評二六の別冊、一九五三〕
- ④ S. A. Queen and L. F. Thomas「The City: A Study of Urbanism in the United States, 1939 (chap. XE)」、R. E. Dickin-son City Region and Regionalism 1947. ibid.: The West European City 1951 (chap. 21)、木内信茂「都市地理学研究」(昭和二六年)拙稿、巨大都市と衛星都市〔日本新地理大系、河出書房 昭和二八年〕磯村英一、「都市社会学」(昭和二八年)
- ⑤ 京都市役所「京都市勢統計年鑑」(昭和二七年)及び「京都市政要覧」(一九五三年上)
- ⑥ 寺尾宏二 明治初期「京都経済史」昭和一八年
- ⑦ 農商務省「工場通覧」(明治四四年)をみると工場数の多い点では京都は東京に次いで第二位となっている。中でも今日の左京・上京地域(当時の上京)が絶対数が最大であり、左京では他に岡崎村に「帝國製糸株式会社」(明治四〇年設立、従業員七八三人)、「野村撥糸工場」、田中村に「杉浦友仙工場」(明治四二年設立)が著名なものである。
- ⑧ 「京都大学一覽」その他文学部史等に設立当時の景観の叙述がみられる。
- ⑨ 菊田太郎「京都市における蔬菜栽培の変遷について」(生産立

地論大要〔昭和八年〕、杉本嘉美「京都蔬菜の来歴と栽培」(昭和廿三年)

村 別	人口総数 (明治41年)	農	林	工	商	交	日 勞 働 者	雑 者	公務 自由	無職 他
白川村	1,792	546	5	110	188	—	69	—	7	867
田中村	4,297	755	—	<u>954</u>	885	157	722	25	<u>144</u>	655
下鴨村	2,227	681	—	55	230	19	70	191	<u>145</u>	836
鞍馬村	770	63	—	5	38	—	558	—	2	103
野口村	1,259	28	—	75	83	80	<u>517</u>	5	10	461
上加茂村	4,161	<u>3554</u>	64	74	56	15	65	25	20	488
大宮村	4,780	874	—	<u>2200</u>	355	28	300	433	60	530

⑩ (「京都府愛宕郡志」(明治四四年)から作成)

明治以後の京都市域形成に関する都市地理学的考察(藤岡)

明治以後の京都市域形成に関する都市地理学的考察（藤岡）

⑪ 服部之総「西陣機業における原生的産業革命の展開」昭和二三
年

⑫ この種蔬菜類の明治四一年現在の生産額の村別種類別数値は次
のごとくであり、早くも上加茂は酸莖菜の中心地となつてゐる。

種類 村	茄子	大根	酸莖菜	かぶら	きうり	南 瓜
愛宕郡	194,250	339,400	33,600	80,100	28,350	43,210
田中村	7,200	42,000	—	—	12,500	5,250
下鴨村	7,500	2,200	1,800	600	7,200	16,800
上賀茂村	36,000	30,000	30,000	6,000	,300	2,300
大宮村	14,000	80,000	3,600	4,500	,525	8,750
鞍馬口村	2,000	36,000	—	—	2,000	6,000
松ヶ崎村	20,000	21,000	—	14,000	,600	—

四八

⑬ 中川村の村落調査は織田教授を中心とする京大地理教室の有志
によりなされてゐるが調査途中のため、他日改めてその成果を
紹介することにする。
⑭ 昭和二七年のものは「京都市役所」の農林課の資料による。

村	耕地	田 (町)	畑 (町)
	年代	明43 (昭27)	明治43 (昭和27)
白川村		489.0 (—)	62.4 (—)
田中村		116.1 (—)	46.2 (—)
下鴨村		69.0 (6.6)	22.5 (5.5)
鞍馬口村		—	11.4
野口村		—	8.8
上加茂村		191.8 (135.0)	28.9 (3.0)
大宮村		—	85.9 (37.7)
修学院村		186.3 (104.0)	22.5 (15.5)
松ヶ崎村		84.2 (19.2)	2.3 (0)
鷹ヶ峯村		—	—

⑮ 藤田元春「平安京変遷史」昭和五年、その他研究費多し。
⑯ 藤本利治、京都盆地における蔬菜栽培の地域的構造（立命館文
学」6・一九五二）
⑰ 京都府教育会「京都府葛野郡史概要」大正一一年

⑮

資料は「洛西製材組合」のもの及び筆者の聞きによる。京都市における製材業の分布三二四についてその各区別の数値をあげると中京区及び右京区が多く、しかもその過半が壬生・嵯峨野・西京・下嵯峨に集中してゐることが知られる。すなわち中京 89, 右京 81, 上京 57, 下京 47, 伏見 20, 東山 16, 本京 14 計 324 (1953年)

⑯

嵯峨野や鴨滝における植木の栽培は既に徳川時代からみられるが、之等及び土地利用の変化については、これ亦改めて別の機会に論じることとする。

⑰

「大正九年度国勢調査」及「京都府紀伊郡誌」大正四年。なお参考迄に大正四年当時の紀伊郡の農家の種類をみると次の

村	人口 密度
田中	3,129
白川	424
修学院	386
下鴨	1,107
松ヶ崎	258
鞍馬口	2,308
上賀茂	458
大宮	513
野宮	5,320
西院	912
朱雀野	3,477
大内	3,600
七条	1,491
衣極	932
笠笠	471
柳原	16,743
東九条	1,461

ごとくであり、既に兼業農家の多くなつて、また蔬菜類中大根(蘿蔔)の生産価格が愛宕郡よりも多いことが注目される。

農家数	総数	専業	兼業
自作	4,633	4,050人	583
小作	8,438	6,808	1,630
自作兼小作	4,125	3,232	903

大根 (972,170匁)
 [漢草・堀内] かぶら (72,280)
 きり (153,620)
 菊 (406,270)
 [漢草・堀内]
 なす (138,100)

⑱

「巨椋池開墾並ニ沿岸既耕地改良事業要覽」
 「明治四十三年京都市統計書」第一編総覽所収の人口を基にし、面積は地形図を基にして計出。人口密度は上記の如くである。

⑲

「大正七年京都市統計書」「昭和五年国勢調査報告」吉田敬市、大京都市実現「地球」十五ノ五)その他を基にして計出。

町村	番号	大正 7年 (1918)	昭和 5年 (30)
修学院	1	308	839
松ヶ崎	2	305	462
上加茂	3	395	610
大宮	4	101	142
鷹峯	5	109	167
花園	6	406	1,067
梅ヶ畑	7	64	68
太秦	8	757	2,358
嵯峨	9	175	274
西院	10	1,102	4,675
梅津	11	858	1,307
松尾	12	158	176
京極	13	920	1,401
桂	14	659	815
川岡	16	629	714
吉祥院	15	663	1,275
上鳥羽	17	829	1,100
竹田	18	1,133	1,954
深草	19	1,343	2,906
堀内	22	626	1,252
伏見	23	9,320	10,876
下鳥羽	24	536	671
横大路	25	357	404
向島	26	271	503
納所	27	1,134	1,328
山科	20	329	719
醍醐	21	192	192

明治以後の京都市域形成に関する都市地理学的考察(藤岡)

町 村	番号	昭和10年	昭和22—25年
雲ヶ畑	1	23	23
岩倉	2	278	300
八瀬	3	92	114
大原	4	41	48
静野	5	69	80
鞍馬	6	46	48
花背	7	25	24
久多	8	11	11
小野郷	9	32	35
中川	10	119	120
向日町	11	882	1,220
久世	15	985	1,172
久我	16	494	567
羽東	17	360	400
大山	18	399	472
新神足	19	672	555
海印寺	20	146	(長岡)
乙訓	12	333	(向日町)
大原野	14	139	159
大枝	13	150	151
大澁	30	339	
笠取	21	31	564 (宇治市) 26年度併 合
宇治	22	392	
宇治町	23	1,088	26年度併 合
榎島	24	226	
小倉	25	690	
大久保	26	465	
山牧	27	417	5,549
御牧	28	467	662
澁町	29	1,014	1,668
八幡町	31	767	911

②④ 水田面積中二毛作田が多く、さらに三毛作田が右京と上京に多いのは集約性を示す。「京都市勢統計年鑑」（昭和二七年）

②⑤ 宮出秀雄「都市近郊農業論」（昭和二五年）及び橋本元、京都市に於ける尿尿の処理と近郊農業（『京大農業経済論集』昭和

一〇年

市 域	一毛作の水田	二毛作の水田	三毛作の水田以上	作上普通畑
全 市	1426.1	1691.81	24.90	564.78
上京区	119.63	103.23	12.92	75.14
左京区	360.17	220.52	0.63	47.27
中京区	1.62	1.87	—	8.5
東山区	171.18	196.55	0.03	50.85
下京区	30.37	118.41	1.38	90.85
右京区	139.41	547.45	9.73	123.07
伏見区	603.70	503.75	0.18	169.04

②⑥ 「統計年鑑」及び京都市編「半世紀の歩み」昭和二四年、農商務省編「全国工場通覧」（明治四四年）中筆者がピック、アップした種類別・地域別工場の分布である。

A 白川石、白川の花、共に現在ではこの地の原料に依存することは少くなり、殊に花は昭和になつてから洋花を他から輸入し、

これを白川の花市において競売することになつているが、それでもなお今日花売に出歩く人々はこの北白川の谷口で二〇〇人以上にのぼり、主として女子の仕事となつており、他に専業の石材業者も十人近くは残つている。

町村	種類	紡織	染色	機械器具	金属品	窯業	醸造	雑	計
上京区		164	39	5	5	0	6	印刷(3) 絵具製造(1) 製材(1)	224
下京区		2	13	4	1	14	5	印刷(3) 製薬(1) 製紙(1) 製材(1)	55
伏見町		3	2	1	2	0	22	製材(1)	31
其他	田中(2), 八瀬 大原(2), 大宮 (6), 衣笠(1) 朱雀野(2), 花 園(1), 西九条 (1), 山科(2), 堀内(1), 佐山 (1), 八幡(1)	野口(1) 田中(4)(1) 朱雀野 (3), 東 九条(1) 西院(1) 竹田(1) 大山崎 (1)	西九条		深草(2) 海印寺 (1)			製材(朱雀野(2) 麩 峨(2)) 製紙 梅津(1)	42
計		190	66	11	8	17	33	27	352

但し 紡織中には絹織物, 生糸, 撚糸, 製綿, 紡績工場をふくむ。

産業	区	全市	上京	左京	中京	東山	下京	右京	伏見
総数		100	100	100	100	100	100	100	100
農林業		5.5	3.35	3.51	0.49	5.99	3.56	15.58	14.01
林業		0.5	0.8	0.6	0.25	0.33	0.19	1.69	0.40
水産業		0.09	0.13	0.17	0.04	0.02	0.07	0.10	0.11
鉱業		0.26	0.15	0.45	0.22	0.14	0.26	0.40	0.36
建設工事		5.27	4.23	7.18	4.29	4.35	5.65	5.76	6.66
製造工業		37.44	44.12	29.89	39.54	35.64	37.51	35.89	31.40
ガス, 電気他		1.27	0.98	1.69	0.93	1.05	1.53	1.34	1.58
商業		18.20	16.37	16.56	24.32	12.08	21.57	12.97	14.66
金融		2.37	2.75	4.50	2.26	1.73	1.77	1.67	1.87
運輸, 通信		6.55	5.42	5.40	6.05	5.10	8.59	6.92	8.46
サービス業		8.75	6.56	8.18	9.36	16.47	8.65	6.11	6.94
自由業		6.89	8.34	11.80	5.69	6.01	4.49	5.94	6.54
公務・団体		5.23	5.60	8.73	4.46	4.44	4.16	4.36	5.54

註⑩ 昭和22年「京都市臨時国勢調査結果報告」による。

産業	金 属	機 械	化 学	紡 織 (染色)	其 他	計
左 京	2	1	0	{ 中他5 田吉3 野3 紫他4	印刷 2	13
上 京	0	3	0	{ 京極3 西太3 山秦1 他内1	紙 (梅津) ゴ (西院) ム (大秦) 具 (大秦) 刷 (太秦)	0
右 京	{ 西梅 院1 津1	{ 西京3 西太1 大梅1 上西1	{ 院3 極1 秦1 津1	{ 京極3 西太3 山秦1 他内1	紙 (梅津) ゴ (西院) ム (大秦) 具 (大秦) 刷 (太秦)	1 2 1 1 1
下 京	{ 上鳥羽3 西九2 他九1	{ 上鳥羽2 西九6 京九8 吉祥4 唐他1	{ 羽2 余8 院4 橋2 他1	{ 西七1 條小1 路1 七條1 九他1	{ 院3 刷器 陶紙 (東九条) 紙 (東九条)	2 1 1 1
中 京	0	{ 西他 京5 他 1	壬 生1	{ 西ノ京4 壬生2 他 2	印刷 (壬生) 製材 (壬生)	4 1
東 山	山 科1	{ 山他 科2 他 1	{ 山本 科1 他 1	{ 山他 科4 深向 1 他 1	陶器	1
伏 見	1	{ 伏竹 見3 竹 田1	{ 伏竹 見1 竹 田1	{ 山他 科4 深向 1 他 1	造具 家ゴ ム	2 1 1
他	0	{ 寺大1 久保1 長八1	{ 宇向1 治日1 岡長3	0	0	0
計	12	50	13	55	21	151

⑳ 小牧実繁、帷子二郎、辻田右左男、藤岡等「新興宇治市を語る」
「地域」七号、一九五三年、未発表

㉑ 昭和27年度「全国工場通覽」（通商産業省編）参照，この表においてはとくに50人以上の従業員を有するもののみについて筆者がピックアップして，その数値を計出した。

史学研究總會・大会

左の日程で本会及び連合大会を開催いたしますので、御案内申上げます。

十一月一日（日）

史料展覧 文学部史学科陳列館

十一月二日（月）九・三〇—四・〇〇

〇〇 京都大学薬友会館

大会 講演

京都府府下における考古學的調査の現状
樋口 隆彦

大阪を中心とした都市群の形成
藤岡謙二郎

傷兵制度の歴史的研究—その経過と成果—
前川貞次郎
柴田 実

題目未定
蘇州文化の一面
宮崎 市定

十一月三日（火）読史会・東洋史談話会・西洋史読書会・地理学談話会各大会

The Chou-hsien System under the Sung Dynasty

An Essay on the History of the Ya-ch'ien

by

I. Miyazaki

The local administration under the Sung dynasty furnishes a complicated structure as well as that of the central government. This is due to the changes through which the *chou* (州), administrative unit of the T'ang dynasty, passed during the rebellion of the *fan-chen* (藩鎮). As a result we see a double system composed of *chou-yüan* (州院) and *shih-yüan* (使院) developed in the *chou* itself and succeeded formally by the Sung. The political aspects of the localities in the transitional ages from the T'ang to the Sung must be understood in the light of these changes which took place in the administrative structure of the *chou*. The *yach'ien* (衙前) was the service rendered by the landlords and took its origin in the *shih-yüan*, military organ of the *chiehtu-shih* (州衙門). It became more and more oppressive with the centralization of the Sung, but as a service rather mean. The reform of Wang An-shin (王安石) aimed at the commutation of this service and the establishment of the system of local taxation, because the *ya-ch'ien* was originally considered as a sort of local tax. After the reform this service was rendered only by the *hsiang-i* (鄉役) in the rural districts.

Urban-geographical Research in the Formation of the City Region of Kyoto after the Meiji Era

by

K. Fujioka

With the development of capitalism goes the urbanization of the city fringe. But in the present Japan we mean by the city also those unurbanized districts around the city. The city region does not necessarily involve urban district only. So there is still room for urban-geography to deal with the regional structure of the urban district involved in the city region. In the present paper I attempted at the survey of the processes of the formation of the urban district in Kyoto city, tracing the changes of *Landschaft* after the Meiji Era, exemplifying demographic

density, transportation facilities, manufacturing district and those areas for commercial agriculture.

By this analysis we can say that the city region of 1889 is the core of Kyoto around which the later developments clustered but at the same time we can clearly witness that the center of the city moved west-southward. The present outline of the urban area often coincides with the isochronomen and ends with the outskirts of the city region from 1918 to 1931. Kyoto is of course a *Millionenstadt* with flavor of the ancient capital, but at the same time a satellite city of Osaka, what is called *Riesenstadt*. So the study of the formation of Kyoto will be of some service to the understanding of the local cities of old origins.

Social Structure under the Gupta Dynasty (3)

by

K. Sato

Under the Gupta dynasty of ancient India the kinsfolk was classified not by the criteria of clan (*gotrā*); but by that of the minor clan called *kula*. The control of the kinsmen by the clan system curtailed before the growing ascendancy of the *kula* and left its slightest trace upon the adoption of the first name, the last remnant of the old days. These minor clans came into being in the process of the disintegration of the clan system and comprised six generations of kinsmen under a patriarch. The properties of the families (*kutumba*) involved in the *kula* belonged to the community as a whole and the patriarch swayed incontrollable power over lands and tenements. Each five of the families made a team work, had an ox together with spades. This seems to have contributed to the control of agriculture and through this system the government imposed taxes on the members of the team. These taxes, however, were not the certain amount imposed upon the certain amount of land but fluctuated according to the crops of the year. In this respect this method of taxation resembled that of the contemporary Sassanides. But in the Sassanides they then inaugurated a taxation reform and proclaimed a land tax, certain in its amount according to the extent of land and this method was succeeded by the Islamites and with their invasion into India it came to prevail there under the Mughals.